

「もののけ姫」を読む

神話と人権的視点から

武部智子

はじめに

日本神話を専門領域にする私にとって、「もののけ姫」を観ていると神話世界がそこに広がっているように思える。ひとつひとつのエピソードを拾いあげれば、かなりの神話的要素を講義できるほどである。

しかし、その一方で「神話」とは異なる見方でこの作品を読み解くことができると思う。そのキーワードが「人権」であることは、ご承知の方も多いであろう。そして、「人権」からこの作品を見ていけば、それはまた自ずと「神話」に結びつくのである。

そこで改めて、「もののけ姫」を「神話」と「人権」的視点から読んでみたい。

1、 崇り神と崇られし者

「崇」はもともと「神の出してくるたたり」をあらわし、「たたる。たたり。鬼神が人にえたいのしれない災いを及ぼす。また、その災い」をいい、神仏、怨霊から悪いむくいを受

けることをいう。つまり、「崇り神」とは、災いをもたらす神のことである。古事記の崇神天皇の条には、大物主神が祟るし、仲哀記にも崇り神が登場する。崇り神は自分が神として祀られない時に崇ってくるのがわかる。つまり、人に神と意識されないことで、人に対して崇るのである。ギリシヤ神話で、人に狂気を与える神であっても神は神であるとして、自分を神として敬わない人に災いを与えるディオニッソス神も崇る神といえよう。

この作品は、冒頭でこの崇り神と化した巨大なイノシシの登場から始まる。巨大なイノシシは、神話の中では古事記のヤマトタケルが伊吹山で遭遇する、まさに山の神の化身である。このイノシシももとは神。それが怨霊となって災いをもたらす神となってしまう。その原因を自ら消滅する間に暴露する。「人間」が原因なのである。「この神は醜く姿を変え、人に対する呪詛を述べ、消滅する。そして人間はそのことに對して、巫女による祓いをおこなうことでその魂を鎮めようとするのである。これは異形の物に対する畏怖と、災いを避

けようとすする心理。そして聖職者とされる神官あるいは巫女によって行われる「清めの儀式」にはかならない。「清めの儀式」が行われる意識下には当然「穢れ」の意識が存在する。

祟り神の死の直接の原因は、村の若者の射抜いた矢であった。そしてその若者アシタカヒコは祟られる。当然神殺しを行つた者は祟られ、祟られた者は村に災いをもたらすとして、追放される。それは禁忌であり掟である。ただ、村を救うことを定められた若者は、村にとっては村を治めていく身分の若者であった。

村を守るために祟り神を葬り、逆にその祟りを一身に負つた若者は、村の、自分たちの世界の行く末を見届けるために村を出る。自分と村の運命を変える元凶となった鉄の玉を携えて、ただ一人ひっそりと村を去るのである。ここには、村を救つた英雄であれ、どんな身分の者であれ、祟られし者は追放されるという過酷な掟が存在するのである。そしてその祟りは神殺しという「禁忌」と「死の穢れ」に他ならない。

2、 境界を越えるということ

村を追放された若者は、自分の運命を変えた鉄の玉を求めてただひたすら西を目指す。そして境界を越えて異世界へ踏み出していく。一方通行の帰りのない旅でもある。神話世界に代表されるように、西方の果ては「死の国」を意味する。

若者は自分の運命を呪いながらも、今を生きる理由を懸命に探そうとする。自分の世界では生きられない。けれども、別の世界では……と。そして、その元凶である鉄の玉を作り、使う者達を捜し出し、その理由を聞き自分を納得させる何かを自身で見極めるために。追放された者の運命は決して元の世界に戻れないものであるということを知りながら、若者は、境界を越え異世界に踏み出さざるを得ないのである。自分が死に向かつていることを実感しながらただひたすら、しかし悠然と前を見つめて西に向かうのである。これは古代の英雄ヤマトタケルを想像させる場面でもある。特に、東征にあつては、自分を排除しようとする父の不条理な権力に「死」を意識しつつ、与えられた任務を遂行し今ある自分を精一杯生きるヤマトタケルの姿を彷彿とさせる。また少年のようなイメージのヤマトタケルが死に至る原因は、伊吹山の神がイノシシとなって現れ、その呪詛によって祟られるためであることを考えると、この主人公の青年アシタカヒコは、ますますヤマトタケルと二重写しになって見えるのである。

3、 悪党と異世界での偏見

町を目前に、野盗となつた野武士が商人を襲っているのを見かけた若者は、思わず矢を射る。石の鏃の威力は凄まじく、腕が落ちたことも気づかない。まさに神業である。勿論祟ら

れた腕は、人が人を傷つける時、自分で制御できないほどの力を発揮しようとする。それは崇り神の呪詛である。「人を滅ぼす」意思が働いているからである。呪いの言葉は、人の醜さを容赦なく破壊しようとするのである。いやそれ以上に神の世界を侵す人間そのものを、人間の世界そのものを破壊しようとするのである。ここに登場する悪党は人間の欲望をむき出しにした行為で、物欲から人を傷つけたり、殺したりする人間の醜さを表している。

一方、町の市はいろいろな人々が往来し、いろいろなかけひきがおこなわれる。もちろん市は異世界と交流できる場所である。様々な姿をした者たちが、それぞれの世界から物を携えてやってくる。しかしはるか東の辺境の世界からやって来た若者の姿は、かつて見たことも無い容姿であり、さらに不思議な動物を連れた若者は衆人環視の的となる。人は自分との類似や多少の差異は黙認できても、まったく異質と感じる者には好奇の目を注ぎ、付かず離れず一定の距離をおいて接するのである。

市で米を買う若者の仕草一つ一つを衆人は見逃がさない。あの変わった動物は何なのか？あの変わった姿をした者ほどんな声でどんな言葉を発し、何をしにここへ来たのか？いったい何を食べるのか？遠巻きにしながら、見て見ぬ振りをし、しかし気になって後をついて歩くのである。あたかも、外国人を初めて見た人、また転校生が来たクラスの子どもたちの

ように。そして代価を手渡すとき、その違いゆえに若者「異質な存在を完全に拒否する。自分たちの共通の理解を越え、若者は砂金を手渡す。見たことも無い砂金に、「これは何だ？」と米を取り返しつっけんどんにあしらおうとする女商人。しかし、僧形の者の一言で砂金の価値を知ったとたん、米はそつちのけで「これは私の物だ」と大声をあげる。

お金の力、お金が全ての世の中を映し出す場面である。欲望にかられる人間たちは、悪党でなくとも私たちの周りに大勢いる。そのものの持つ真の姿や行いを見定める努力なしに、一方的な価値基準で人を評価する人間の醜さを表しているのである。

4、 巨大な白い山犬と少女サン

「巨大」であること。「白い」色。これは神の姿である。神の化身である。神は非常に大きな姿をしていて、人間の世界（地上）では小さくなって登場することが多い。この作品の山は太古の神々が齋く世界そのものを表している。まさに巨大な白い山犬は神そのものの姿なのである。

では何故「もののけ姫」の中に白い山犬が登場するのか。これは「蹈鞞」と関係がある。蹈鞞場で信仰される神は、白い犬に乗った姿で描かれることがある。しかも女性神である。産鉄者はその神を「金屋子神」と呼び、多く蹈鞞場では、そ

の姿を掲げて信仰した。まさに白い山犬に乗った少女サンの姿である。サンは山犬と暮らす少女であるが、人が山犬を恐れ、山犬から逃げるために投げ捨てた赤ん坊で、山犬に対する犠牲であったのが、結果山犬によって育てられた少女である。

「動物によって育てられる子どもの話」は、例えばローマ建国の神話に登場する狼に育てられた双子ロムロスとレムスのように神聖なものと考えられる。彼らのように神と人の間に位置する存在とは何を意味するのだろうか。伝説の世界においては、神の力を持つ人間を英雄や王と捉える。ロムロスのようにローマ建国の王として、後には神として考えられているのがよい例であろう。彼らは本来の自分の世界を離れ、異世界を彷徨う。そして神としての力を開花させて自分の世界に戻ってくる。まさしく英雄誕生の行程を踏むのである。ではこの物語で少女サンはどのような役割を持つのだろうか。

初めてアシタカヒコに出会った川辺での少女サンは毛皮を被っている。異世界のモノの姿である。また、顔面に朱の入れ墨を施している姿は、まるで埴輪に見られる巫女の姿である。そして神（動物）と人と言葉を交わし、神の世界と人間の世界を自由に行き来する。この場面からは、巫女的性質を持ち、神と人との中間に位置する存在であるという印象を受けられる。

そして、もう一つは、前述のように白い山犬に乗って金屋子神の様な姿で人々の前に現れる。金屋子神であるからこそ蹈鞴場に現れるのである。

播磨国風土記・讃容郡の条に

山の四の面に十二の谷あり。皆鉄を生だせり。難波の豊前の朝廷に始めて進りき。見頭はしし人は別部の犬、その孫等初発めて奉りき。

とあり、鉾山を発見したのは「別部の犬」であることがわかる。これについて若尾五雄氏は「明らかにこの犬とは鉾山師のことである。」とし、土佐国野根山伝説にある狼と鍛冶屋の姥の話から「狼は、おイ又さんと云われ、狼 犬と同一である。」と述べる。(注1)

また、狼や犬の話が山神について語られること、鉾山神が犬を連れているという話、出雲国で金屋子神を発見した朝日長者の犬の例などを挙げ、鉾山神と犬との関わりを述べている。

また、蹈鞴の里では金屋子神の信仰と同時に稻荷信仰も盛んである。稻荷社の起源は、山城国風土記逸文に、

称伊奈利者、秦家中家忌寸等遠祖伊侶具秦公。積稻梁有富裕。乃用餅為的者。化成白鳥飛翔居山峯生子。一子化成

稻。遂為社其苗裔悔先過。而拔社之木殖家。禱祭也。

(傍線筆者)

とあって、これは東南アジアに広く分布するモチーフ穀霊の逃亡譚と考えられ、白鳥＝稲を祭ることが豊穰と結び付くことと

なるのである。

面白いのは、『鉄山秘書』に記される縁起に、金屋子神が降臨した播磨国志相郡岩鍋の地から、白鷺に乗って天空を飛翔し、出雲国能義郡の桂の木の枝に天下り、「吾は金屋子神なり、今よりここに宮居し、タタラを立て、鉄吹術を初むべし」と宣せられたのである。(傍線筆者)この二つの伝承をみると、白い鳥は山頂にとまり神が祀られることで、その後富をもたらずこととなるのである。

稲荷の神の使いは狐であり、狐が稲穂を盗んで人にもたらしたという伝承や、昔話「狐女房」などでも豊作をもたらす存在である。中国南部の穀物盗みの伝承では、犬が盗んだとされている。(注2)一方で、謡曲「小鍛冶」は一条天皇の勅命で刀作りをすることとなった刀鍛冶三条宗近が、伏見稲荷神社に祈願したところ、神が白狐に化身して現れ一緒に鎚を打ち、名刀「小狐丸」を鍛えたという物語である。また、金屋子神降臨の別伝には、神が狐に乗ってきたとも伝承される。

(注3)

このように、犬と鍛冶師、稲荷と蹈鞴、農耕と稲荷、鉄と農耕など、いろいろな文化的要素が交錯しながら結び付いていると考えられる。広辞苑や漢字源によれば、「モノ」とは動物・植物・鉱物に三別し、また天然物・人造物に両分する、天地間に存在するものをいい、神や魂など霊妙な作用をもたらす存在をいう。「ケ」は実体を手にとることはできないが、その存在が感

じられるものをいう。「ものけ姫」サンの存在を考えてみると、「山は産なり」の言葉にもあるように、山はあらゆるものの生産の場であり、それゆえ山の神は女性神であり、産み出す神の使いとして、自然の作用と人の作り出した文化を繋ぐ存在として登場するのではないかと思われるのである。

(注1)

若尾五雄「近畿山岳信仰と丹生」三 狩場明神と犬 四六九〜四七三頁。

『近畿霊山と修験道』(山岳宗教史研究叢書十

一) 五来重編 名著出版 S五三

(注2)

大林太良『稲作の神話』三二〇〜三二五、三四三〜三四八頁。弘文堂 一九七三

(注3)

田村克己「鉄の民俗」「鍛冶屋と稲荷信仰との関係」二六三〜二六五頁。

『稻と鉄』(日本民俗文化大系三) 森浩一ほか

小学館 S六一

5、たたら 蹈鞴製鉄の隠れ里

特殊な技術を隠し持つ集団が人里離れて暮らす場所。それが、隠れ里。ここでの技術は「蹈鞴」製鉄をいう。

古代では物を作り出すことは神の業とみなされた。鉄を作り出すためにはまず何よりも火が関与する。

火は雷や火山の噴火、山火事などを引き起こす恐ろしい神であつたが、一方では人が火を得ることにより、それまでの原始的な生活が一変する。火で食べ物を調理し、人の暮す空間を火で暖め、動物の襲来を防ぐ。それゆえ鑽火神話などが語られるように、人は神のものであつた神聖な火を神から与えられ、あるいは盗み出すのである。その神聖な火の中から鉄が生まれる。人々は、少しでも多くの鉄をもたらししてくれるよう火の神に祈り、崇拜する。

日本神話では、産み出す神イザナミによつて火の神カグツチが誕生する。しかしそれはイザナミの死と引き換えの誕生である。夫であるイザナキは十拳剣でカグツチの首を斬る。文化の象徴である火を剣で殺すのである。その剣に付着した血からは刀剣神であるタケミカヅチ等の神々が誕生する。このタケミカヅチは後に王権と強く結び付く。男女一对の生殖神が産み出した火の神から文化神である刀剣神が誕生することとは、自然物の中から火を通して文化が生産されることを意味し、一方で火に対する犠牲（死）を伴うことが示唆されている。

そして製鉄の神も誕生する。その後、大陸から漢代の製鉄技術が伝来し、それと同時に陰陽、十干・十二支などの天文や暦法と陰陽五行説がもたらされ、これらが集合して鉄山独特の信仰形態ができあがつていくこととなる。その中国には「干将莫邪」の伝説があり、宝剣の伝説には火の犠牲が語ら

れている。田中克己氏（注1）は、『呉越春秋』巻二に伝わる話として、次の話を紹介している。

干将は、呉王の命令により剣を作を試みるが、三か月経つても成功しない。理由を妻の莫邪に訊ねられた干将は、かつて自分の師欧冶子が、同じようにうまく行かなかつた時、妻ともども炉に入つて治まったことを語る。そこで莫邪は、髪と爪を切つて炉中に投入し、三百人の童男童女に命じファイゴの風を起こさせ、鉄を容融し剣を作り出すことに成功する。

田中氏によれば、男女の鍛冶屋の話は、アフリカ、東南アジアにも多く分布しているという。そして男女の鍛冶屋の火の犠牲は、一種の聖婚であり、生産そのものと結びついているという。こうした火の犠牲が、金屋子神が「死の忌みを好む」と伝えられる理由であろう。

もう一つレガリアとしての刀剣が出現する神話にスサノヲによるヤマトノヲロチ退治がある。神話の前段でアマテラスの田や新嘗殿や忌機屋の屋根を壊すスサノヲの暴力は文化を破壊する自然の姿で、その後五穀神であるオオゲツヒメを殺し出雲国へと降るスサノヲは、出雲国肥河の上流でヤマタノヲロチの犠牲になるところのクシナダヒメを救うため、ヤマタノヲロチを酒に酔わせ動けなくなったところを十拳剣で斬り退治する。そのヤマタノヲロチの尾から出てきたのがツムハノタチで、これはスサノヲによつてアマテラスに献上され、

後に伊勢にいたヤマトヒメからヤマトタケルが東征の折に預かった神宝草薙剣である。

記紀・風土記の中から「鉄」に関する記述を集めるとかなりの量を集めることができる。日本各地にあつた蹈鞞の隠れ里の伝説は「鉄」とともに大和朝廷を支え、燃え盛る火の中から現れる宝剣は王権のシンボルとなる。

奈良時代に入ると、仏教の伝来に伴い多くの鉄工関係の工人が帰化し、製鉄の新しい技術を伝えた。中央集権化が進むと鉄は租税の品物として集められ、管理されたようである。以後各時代を通して時の権力者が鉄製品を管理した。それは戦国時代に至って、新兵器としての鉄砲の登場、豊臣秀吉による刀狩りなど権力を脅かす存在として鉄製品が取り上げられる事をもみても理解できよう。このように鉄は王権と結び付き「王者の地位を約束するとともに、破滅をも導く二律背反的性格を帯びている」(注2) ものなのである。

王権が安定するためには国土が豊かでなければならぬ。

農地を広げるために鉄製の鋤や鍬は歓迎され、鉄は農耕や豊穣と関連される。正倉院御物に「子曰手辛鋤」がある。柄には「天平宝字二年正月」の文字があり、その年の初子の日の農耕儀礼に用いられたことがわかる。農地の拡大は自然を破壊し、また自然によって農地も破壊される。鉄製品が人間社会にもたらす影響は自然と文化の微妙なバランスの上に成立している。

(注1) 田村克己「鉄の民俗」第三章 金属文化の受容と

展開「二六三―二六五頁。

『稲と鉄』(日本民俗文化大系三) 森浩一ほか

小学館 S六二

二六〇頁には「火の力によって新しい鉄を「生み」出す仕事は、男性原理と女性原理の結合が必要とされる。それゆえ炉への犠牲になることは、人間と金属との間の「聖婚」のしるしである。あるいは炉への犠牲は、新たな生命の誕生と豊饒の前提には、死の犠牲の必要であることを語っているのかもしれない。」とある。

(注2) (注1)に同じ。二六二頁。

6、 恐れられる女性指導者

隠れ里の首長は鉄砲の腕前もすこぶる良い女性で、烏帽子御前(以下エボシ御前)と呼ばれている。武器を作る隠れ里の指導者としてなぜ女性がその役目を与えられ、またなぜ白拍子の姿で描かれるのだろうか。

古代の女性と家との関わりについておもしろい歌が万葉集に載る。

上総の末の珠名娘子を詠む一首 并せて短歌

しなが鳥 安房に継ぎたる 梓弓 末の珠名は 胸別の
広き我妹 腰細の すぐる娘子の その姿の
きらぎらしきに 花のごと 笑みて立てれば 玉鉾の

道行き人は 己が行く 道は行かずに 呼ばなくに

門に至りぬ さし並ぶ 隣の君は あらかじめ

己妻離れて 乞はなくに 鍵さへ奉る 人皆の

かく迷へれば うちしなひ 寄りてそ妹は

たはれてありける(一七三八)(傍線筆者)

反歌

金門にし 人の来立てば 夜中にも 身はたな知らず

出でてそあひける(一七三九)

この歌から珠名娘子は、東国に居た容姿の優れた美女で、道行く男たちに笑顔を振りまいては関係を持っていた遊女といえよう。注目すべきは、傍線の部分で妻帯者である隣家の男とも関係を持っていて、男は妻と別れてさらに家の鍵さえ預けたというのである。もちろん家の鍵というのは、家の蔵の鍵のことで、この歌から、財産を預かり管理していたのはその家の妻であったことがうかがえる。通い婚であった時代、当然その家の実権は女性が有していたことは否めないが、それを基盤として、女性と男性との社会的地位はさほど変わることなく、「家刀自」「家女」などと呼ばれ中世まで引き継が

れていく。

特に「遊行女婦」と呼ばれた芸能者たちは、時代とともに様相を変えながら、芸能者としての地位を固めていった。巫女や采女といった女性としての聖性と女房や遊女・白拍子など教養人としての彼女たちは、当時の権力者たちと関わりを持ちながら、庇護され、特権を与えられてもいた。例えば、万葉集の天平二年(七三〇)大納言を兼任し、帰京することになった大宰帥大伴旅人に、袖を振って名残を惜しみ歌を贈った遊行女婦児島や後拾遺和歌集の遊女宮木、千載和歌集の遊女戸戸、新古今和歌集の遊女妙、玉葉和歌集の遊女初君、西行法師と歌を交わした遊女江口君、平清盛の寵愛を受けた白拍子巴御前、祇王・祇女、仏御前、源義経の寵愛を受けた白拍子静御前などがいる。

一方、歴史の表に登場しない女性たちも、鮎売りの桂女や炭薪売りの大原女、魚貝売りの供御人となった女たち、精進物売りの女供御人、綿・小袖売りの女安居神人など、女商人として活躍し天皇や神に直属する女性の供御人や神人などがある。さらに言えば商業や生産業に従事する女性たちはかなりの人数を数えたに違いない。

この隠れ里の中で女性たちが蹈鞴を踏んで産鉄に従事していること、女性が指導者であること、癩者が関わっていること、現代社会を投影しているとの考えもあるが、隠れ里の大切な財産を教養の高い女性が管理すること、里の中で男女

が同じ立場で鉄の生産に従事すること、癩者がその特異な技術をもって畏敬の念を抱かれていることは古代から中世にかけては問題のないことと思われる。

以上のようにエボシ御前が女性であつても里の指導者であること、また白拍子の姿に描かれる理由をもう一度考えてみると、近代の投影というよりはむしろ中世世界を投影しているといえよう。なぜなら、「蹈鞠場」にいる者、癩者、白拍子、牛飼いなどこの里に描かれている人々は、中世民衆史上では「非人」と呼ばれていた人々であるからである。

この人たちが身分的に蔑視されるのは仏教思想の民衆への広がりによって中世以降近代にかけてである。こういつたいわゆる「非人」と呼ばれる人々は、当時の権力者と結び付いていて、特権を与えられていたことは前述のとおりであるが「もののけ姫」におけるエボシ御前は、女性でありながら古代から王権のシンボルである鉄器を作り出す里の指導者として、また新しい時代の鉄器を作り出す者として、まさに権力と結びついていた。

山を切り拓き、鉱石から鉄を取り出し、石火矢と呼ばれる鉄砲を作り出す。燃え盛る火の中から生み出される鉄砲とそれによって多くの命を死に追いやる。エボシ御前は人でありながら、生と死の神のごとき力を持つことになるのである。

7、 隔離される者

隠れ里の中に、さらに人の寄り付かない場所がある。女性指導者のエボシ御前が、異邦人であるアシタカヒコを連れていく隔離された場所。その中では、体中に白布を巻きつけた人々がいる。ある者は座つて銃を組み立て、ある者は銃身を磨き、またある者は寝ている。その中に生活する者は、皆共通の病を患っている。特に重症で、しかし一番の主たる老人らしき人の言葉「わしらの病を恐れず、わしの腐った肉を洗い、布を巻いてくれた」という表現により彼らの病が何であり、どのような境遇であるのかをうかがい知ることができる。

世間から見放され、恐れられる彼らは、中世の世界ですでに蔑視されていた癩病患者である。はつきりと「癩病」とは表現されないが、その描写と会話から想像することができる。

実は、私がこの草稿を書き始めた時、この章でピタツと筆が止まっていた。感覚的には何となく理解していても、「やはりこの問題は中途半端な知識では論じてはならない」と私の中でブレーキがかかったまま約二年が過ぎようとしていた。真正面から「人権」について学びたいと思つていた時、地域でのボランティアの一環として、市の「人権教育協議会」の地区代表になった。参加できる限り研修会に足を運び、多角的に「人権」を考える機会を得た。しかし「人権」学習の特

に差別に関する昔は江戸時代から語られることが多く、古代を研究する私にとっては納得のいかないことが多かった。ちょうどその頃「ハンセン氏病（癩病）」に関する講演を聴く機会があった。その時の主な内容は現在を中心に語られた。それは今現在も苦しみを背負う人々がいるという事実を知る機会でもあり、当然のことであると思つたし、それでほんのわずかでも「ハンセン氏病（癩病）」について知ることができたよい機会であった。その時、私は講師に質問してみた。「古い時代もこの病気がなかったわけではないでしょう。例えば中世では、患者たちはどのように生活し、どのような差別を受けていたのですか」と。はつきり明確な回答を得たわけではなかったが、その時に「法華経」の話があり、それを手がかりに私自身は再び勉強を始めることができた。ただし、中途半端な知識で、あれやこれやと読むとかえつて理解が困難になることを避けるために、あえて横井清氏の「中世民衆史における『癩者』と『不具』の問題 下剋上の文化・再考」をじっくり読むことにした。

今なお、表面的な理解しかできていないが、その中から「もののけ姫」における「癩者」の位置付けを「人権」的視点から私なりに考えてみたい。

癩者について、日蓮は『佐渡御書』（一一七二）の中で次のように語っている。

「世間に人の恐るゝ者は、火炎の中と刀剣の影と、此身の死するとなるべし。牛馬、猶身を惜む、況や、人身をや。癩人、猶命を惜む、何況、壯人をや」

この言葉の背景を横井氏は「医療なきままにいきながら朽ち果ててゆくことを余儀なくされた人びとの姿があり、やがて朽ち果てることを思い知らされながらも懸命に『生』をつづけようとした『癩者』たちの姿があった」と述べられている。

では、中世の癩者たちは、どのような生活をしていたのであろうか。

鎌倉時代、建治元年（一一七五）の請文（誓約書）によると、患者が発生すると本人と親類とが相談し、相当の志をそえて監督者（注1）に引き取られるというのが普通であったらしい。つまり監督者にとっては「癩者」の身柄を引き取つて、自分の監督下に置くことは、ある意味収入を確保することであった。ただし、それは「癩者」達の（彼らの）そこでの生活を保障されるものでは決してなく、まだ体の動く者は、他の者たちと同様に仕事や雑業に従事することもできたが、病状の重い「癩者」にとっては、物乞いをするのが、生き続けるために残された唯一の手段であった。それは、「一遍聖絵」のように、「癩者」は白い被り物を着け寺社の門前や、交通の要所に位置する道端、「乞場」あるいは「施場」と呼ばれる特定の場所で、まるで見世物のように施行、喜捨を受けた

ようである。

この病は業病とされ神仏の罰として現れるとされる。中世末から近世にかけては数多くの伝説がある。説経節の代表作とされる「しんとく丸」などが代表的なもので、その内容は、

河内国高安郡に信吉長者という者がいた。この長者の前世は丹波国の山人で、夫人は前世、近江国の大蛇であった。夫婦は何一つ不足ない生活を送っていたが、子宝に恵まれず、清水観音に願掛けし、しんとく丸を授かった。ただし、約束通り、夫婦いづれかが命を失わなければならぬ。しんとく丸が成長したある日、母親はうっかり観音を冒瀆する言葉を口にした。そして夫と幼子を残して死んだ。

その後、八条殿という都の公家の娘が後妻となり、一人の男の子を産み、しんとく丸を呪う。呪願は聞き入れられ、しんとく丸は継母の呪いによって癩者となり、捨てられて漂泊の乞食となる。摂津国四天王寺へ、また紀伊国熊野へと、病苦・貧苦の現実からの救済を求めて放浪する。

和泉国かげ山長者の一人娘の乙姫は、かつて四天王寺で幼いしんとく丸の美しい舞姿を見染めて許嫁となっていたが、しんとく丸の不幸を知って後を追う。そしてしんとく丸と再会し救出した。清水観音の靈験によって治癒

し、二人は和泉国の乙姫の館に帰っていく。

しんとく丸の父、信吉長者はその後仏罰によって没落し、盲いて後妻とその子どもとともに乞食生活をしていたが、和泉のかげ山長者の館にいたしんとく丸が貧者への七日間の施行を行ったさい、数多くの乞食たちに混じっていたのをしんとく丸に見つけられ救われる。というものである。

継母の呪詛により癩者となったしんとく丸は、家を追われる。そして現実からの救済を求めて漂泊し放浪する。つまり、呪詛によって祟られ、村を追われ、現実に抗いながら漂泊し放浪するアシタカヒコも同じ運命を辿るのである。

「もののけ姫」の中で、隔離された場所で、癩者と見受けられる体中に白布を巻いた者たちが、静かに作業を行い時間を送っている。淡々と自分たちに与えられた銃を組み立てるという仕事をこなしていく。おそらく各々の命の尽きる時まで。自分たちの存在が、その作業に必要であるという使命感、言い換えれば、銃を組み立てるといふ作業には自分たちが必要不可欠であるという使命感は彼らに生きる望みを与え、それを保障してくれるエボシ御前という女性指導者への感謝の気持ちを持ちつつ、彼らは迫りくる死と向き合いながら生きているのである。しんとく丸が乙姫に救われ、癩者たちがエボシ御前に救われ、アシタカヒコが「もののけ姫」サンに救われるところに共通の思いを見出すことができるのではない

だろうか。

恐れられ、見捨てられ、見世物にされ、自分の生きる場所を求め、死に向かう自分を見つめながら、それでも今ある自分を精一杯生きる。それは「癩者」に限らず、アシタカヒコもまた彼らと同じなのである。

(注1) 『日葡辞書』には、彼らの監督は河原者や長吏での

仕事であったと書かれている。

8、 シシ神の世界

山に踏み込むこと。それは、「人間の」ではない異世界に入り込むこと。それは地上における神の世界であり、人が踏み込んで侵してはならない世界である。傷ついた者を運びながら、「木霊」に出会う。「木霊」は若者のいた世界にもいたとつばやく。「木霊」のいるのは森が豊かな証拠である……。「木霊」とは、木の精霊である。アニマそのものである。豊かな森にはたくさんの木があり、その一本一本に靈魂が宿るとされるアニミズムの世界がそこには存在している。

また、聖域と思われる湖沼には美しい水が湛えられて、その底には見たことも無い動物の足跡がくつきりと残されている。その動物こそが獣神(「ものけ姫」の中ではシシ神)である。そしてその水は聖なる水なのである。傷を癒し、生命

力を与え、そして穢れを祓う力を持つ水なのである。この美しい森、山、水…大自然そのものが神の世界であり、領域である。神々しいまでに美しい森の中に現れた鹿神の圧倒的な存在に、アシタカヒコは神との出会いに心打たれ畏敬の念を抱くのである。

『今昔物語集』巻五第十八に「身色九色鹿、住山出河辺助人語」という話が伝わる。その内容は、

昔、天竺の山の中に一頭の身は九色で角の色が白い鹿が住んでいた。ある時その山の麓の川で一人の男が溺れていて、死にそうになっていた。その男を救った九色の鹿は、その恩にどのように報いようかと聞く男に「ただ我この山に住むという事を、ゆめゆめ人に語るべからず。我身の色九色なり。世にまた無し、角の白き事雪の如し、人我を知りなば、毛・角を用ぜむによりて、必ず殺されなんとす。此事を想るゝが故に、深き山に隠れて住む所をあへて人に知らせず、しかるに汝が叫ぶ声をほのかに聞きて、哀れみの心深くして出でて助けたる也」と答えた。

そうこうするうちに、后が夢に九色の鹿を見て、「我に与え給へ」と大王に請うた。大王は九色の鹿を捕えた者に金銀、珠玉等の宝、ならびに望みのものを与えると宣言を出した。すると鹿に助けられた男が欲望を抑えきれず参内し、深山の鹿の住む場所を知っている。軍衆をつけていた

できれば捕つてくると奏上した。

大王自ら軍衆を率いて山に入ると、九色の鹿はとても逃れられないと自ら姿を現して、大王の御輿の前で跪いて「大王いかにして我栖を知り給へるぞや」と尋ねた。すると大王はここにいる顔に癩瘡のある男が教えてくれたと鹿が救つた男を指した。九色の鹿は「あの時自らの命を顧みずに助けてやったのに」と涙を流した。

大王は深く感じ入って、「今日よりのち、国の内に鹿を殺すことなかれ。もし此宣旨をそむきて、鹿一つにても殺せる者あらば、その人を殺し家を亡ぼすべし」と宣した。

その後国内は病もなく安全で、五穀豊穡になり、貧しい人もなかった。

というのである。

また類話『宇治拾遺物語』の「五色鹿事」では一貫して鹿は五色で、結末部では鹿の前で男の首を斬らせるとなっていて、「もののけ姫」の結末部で首をはねられたのが、男かシシ神かという事こそ異なるが、これらは同じ物語と考えられる。

このシシ神の性質を表現している場面がある。

1、光をまとい登場し、アシタカヒコがその存在を感じ立ち尽くす場面。

2、シシ神の足跡に植物が芽吹き、すぐに成長して枯れてしまう場面。

3、瀕死のアシタカヒコの命を救い、祟り神になりかけている猪（乙事主）の命を吸い取る場面。

アシタカヒコがシシ神のことを「生と死と二つとも持っている」と表現したが、これらの場面からもシシ神が実は生と死の両方を司る神であることがわかる。

1は数頭の鹿を従えて、最後に神々しい光の中に悠然と現れるシシ神。ただ黙つて人間を見つめる姿は威圧的でもある。まさに神の登場にふさわしい。

2は種子を芽生えさせる力を現し、神話の中では植物神、穀物神などに与えられる力である。ギリシャ神話では、デメテルが娘コレー（美しい娘の意。名はベルセフォネ）を冥界の王ハデスにさらわれた時、怒りで大地に草木を生やさせなかった。またメソポタミア、バビロンの愛の女神イシュタルは、夫である植物神タンムズを失い、タンムズの消えた地上では植物が育たなかった。半年後タンムズが地上に現れると植物が芽吹く。

3は死を司る神は冥界の王であるとする神話が多い。

これらを総合的に見た時、私は日本神話における伊耶那美命（以下イザナミ）を思い浮かべた。夫伊耶那岐命（以下イザナキ）と共に生み出す神であるイザナミは宇宙から降り立ち、国土を創造し、自然を創造し、文化を創造し、最後に火の神カグツチを産んで焼け死に、黄泉国（＝死者の国）へ下る。そして夫と事戸（離婚の言葉）交わす時「一日に千人殺

す」と述べる。そして黄泉津大神（「偉大な黄泉の神」となる。しかもイザナミの黄泉国下りは、大地の底から人間が生きるための穀物を生み出すという母なる大地という役割をその背景にもっている。つまり、イザナミは生と死を司る神であるといえる。そしてそれは農耕民にとっては重要な神であった。

ところで、人間は、農耕を始める前、狩猟生活をしていた時代があった。紀元前六〇〇〇年頃のアナトリア、ボアズキヨイのチャタルホユックの遺跡から出土した世界最古の地母神像は、二頭の動物の頭を手をおいたふくよかな母体をしているし、ラスコーやアルタミラの洞窟壁画は大地の母の子宮とされ、その中に数多くの動物が描かれている。いわゆる旧石器時代には、人間は動物の命から生きるエネルギーを得ていたので、神はしばしば動物の姿を借りて描かれるようになる。

例えば、古代エジプトの神々は動物の顔をした人の姿で表現され、イシス女神は元々牛の顔に立派な角がある姿であったが、後には人の容姿に牛の角だけを頭に頂いた姿で表現されるし、前述のバピロニアのイシュタル女神も、やはり黄金の角を頭に頂いている。

この様に狩猟時代から農耕時代へと人々の生活が移り変わり、人間の生命を維持する食べ物が変化していった時、その食べ物を生み出す神の姿も、動物から人へと姿を推移させて

いったと考えられる。人が生きていくのに必要なものを生み出す神は、また人の命を奪うこともできた。それが生と死の両方を司る神となったイザナミの真の役割であった。

冒頭シーン「むかし、この国は深い森におおわれ、そこには太古からの神々がすんでいた」とあるように「もののけ姫」においては、太古の時代の神々を表現している。では先史時代の生と死の両方を司るシシ神が鹿の姿で描かれる理由は何であろうか。

一体、鹿が生命を分け与えるものと捉えるのはなぜなのだろうか。日本には、「角鹿」という地名があった。垂仁紀二年の一云に、崇神天皇の御代に額に角のある人が船に乗って筥飯浦にやって来たので、その場所を「角鹿」というようになったという地名起源がある。この地名起源は不思議である。

角のある人 角鹿であれば、人 鹿ということになる。また筥飯浦 角鹿では全く意味が理解できない。「角鹿」はまさしく「角を頂く鹿」を意味しているが、その「角鹿」は現在の「敦賀」でその一宮、氣比神社には「筥飯大神」を祭る。

ケヒのケは食べ物、ヒは霊力を表し「筥飯大神」とは食べ物の神のことで、その後その国は「御食国」となった。角鹿の鹿は食べ物と結び付くと考えられる。

鹿にまつわる伝説は古くからあるが、播磨国風土記・讃容郡の条には次のような伝承がある。

讃容郡。 讃容と云う所以は、大神妹妹二柱、各競ひて国

占めましし時に、妹玉津日女の命、生ける鹿を捕えへ臥せて、その腹を割きて、稲をその血に種きたまひき。すなはち、一夜の間に、苗生ふ。すなわち取りて殖えしめたまふ。ここに、大神勅云りたまひしく、「汝妹は、五月夜に殖えつるかも」とのりたまひき。すなはち他し処に去りき。故れ、五月の郡と号け、神を贄用都比売の命と名づく。今も讚容の町田あり。すなはち鹿放ちし山を、鹿庭山と号く。

(傍線筆者)

また同じく、雲潤の里の条には、

雲潤の里。土は中の中。右、雲潤と号くるは、丹津日子の神、法太の川底を雲潤の方に越さまく欲ふと、尔云ひたまへる時に、彼の村に在せる太水の神、辞びて云りたまひしく、「吾は穴の血以て佃る。故れ、河の水を欲りせず」とのりたまひき。尔時、丹津日子、云りたまひしく、「この神は、河を掘る事に倦みて、尔云へるのみ」とのりたまひき。故れ、雲弥と号く。今の人は雲潤と号く。(傍線筆者)

とあって、鹿の血によつて稲が豊作になると伝えるものがあり、鹿が作物の豊かさ結び付けられている。(注一)

また撰津国風土記には、

父老相ひ伝へて云はく「昔者、刀我野に牡鹿ありけり。その嫡の牝鹿、この野に居りけり。その妾の牝鹿、淡路の国の野嶋に居りけり。その牡鹿、野嶋に屢往き、妾と

相愛比ひなかりけり。既に牡鹿、来りて嫡が所に宿りぬ。明旦、牡鹿その嫡に語りて云ひつ「今夜の夢に我が背に雪零りおけりと見き」といふ。また曰ひつ「すすき村生ひたりと見き。この夢は何の祥ぞ」といふ。その嫡、夫のまた妾が所に向くを悪み、乃ち詐り相せて曰はく「背の上に生ひたる草は、矢、背の上を射る祥ぞ。また雪の零りけるは、塩を舂きて穴に塗る祥ぞ。汝、淡路の野嶋に渡らば、必ず船人の遇ひ、射えて海中に死らむ、謹勿また往きそ」といひけり。その牡鹿、感恋に勝へず、また野嶋に渡りけり。海中にて遇に行く船に逢ひ、終に射殺さえけり」とそいふ。

故、この野を名けて夢野と曰ふ。俗、説へて云はく「刀我野に立てる真牡鹿も夢相のもまにまに」といふ。

(傍線筆者)

や、仁徳紀には

昔、一人ありて菟餓に往きて野の中に宿りき。時に二つの鹿も傍に臥せり。鶏鳴に及らむとして、牡鹿、牝鹿に謂りて曰はく「吾、今夜夢みらくは、白き霜多に降りて吾が身を覆ひつ。是は何の祥ぞ」といふ。牝鹿、答へて曰はく「汝、出で行かば必ず人がため射えて死なむ。

即ち白き塩を以ちて其の身に塗らえむ。霜の如素きはそが心そ」といふ。時に宿れる人、心の裏に異しむ。未だ味爽に及らぬに、獵人ありて牡鹿を射て殺しつ。是を以

ちて時の人の諺に曰はく、「鳴く牡鹿も相夢の随に」といふ。(傍線筆者)

とあって、鹿肉も食していた。つまり、狩猟の場でも農耕の場でも鹿は食の豊かさ結び

ついていた。

正倉院御物の中に「金銀花盤」という花のような角を持つ鹿の文様を浮き上がらせた銀製の大皿がある。おそらくは中央アジアからもたらされたこの大皿は、遊牧民たちのイメージした鹿であったのであろう。遊牧民たちにとって動物は、育て、その命によって自分たちの命を繋ぎ、生きる場所を移動させながら、ともに生きていくものであった。

犬や牛や猪が人間に飼い馴らされ、牧畜化されていくのはちがって、鹿は野生動物として存在し続けた。そしてその頭には立派な角を頂く動物の王であったのである。

この山と対照的に荒れ果てた山は川(湖)を隔てて対岸にある。それは人間が木々を切り倒し、山を切り開き、砂鉄を採り、薪をくべ高炉を熱し、空気を汚し、川を濁す鉄砲作りの隠れ里である。その山の神は、その鉄の玉によって傷つき、人間を恨み、人に対するたくさんの憎しみを心に抱き祟り神になってしまったあの猪神ししかみであった。

(注1) 新編全集本の七五頁頭注に「生血の靈力を祈る呪

術」「平林章仁は、鹿が銅鐸に水辺の動物として

描かれることから、水を得るために水神に捧げられ犠牲と説く。」とある。

9、 山へ入る僧

僧形の者の登場は、この作品を上代世界から中世世界へと見るものの認識を一気に変化させる。この者は誠に不思議ないでたちをしている。法衣を着、白い頭巾を被り、一本足の高下駄を履く。この一本足の高下駄に獣の毛皮を頭から被るという不思議ないでたちで山深く神の領域に踏み込んで行く僧の姿からは、山岳宗教の山伏の姿を想像してしまうのは私だけだろうか。

そもそも古代の山岳信仰は神の領域である山にアニミズムを感じ、その中に踏み込む時はアニマの姿(この場合は動物アニマル)になってその世界に存在することが必要となる。それ故、現在に至るまで山伏たちは、動物の毛皮を腰に巻き付け鈴掛をかけ、帽子冠をつけ、ホラ貝を吹き、錫杖を持ち、道なき道、獣道を歩くのである。

人が大自然の中に入り込む時、私たち人間が及ばない力をその身に感じるのである。偉大な自然の世界では、理屈や言葉や知識や道具など、人が動物と異なる変化をして、人間独自の文化を築いたことは全く意味をなさない。ただひたすら生き物としての本能に頼ることこそが、その世界に存在する

ことを許される唯一の力である。

山岳宗教である修験道は、仏教特に真言密教と関わりを持つ。役行者などはその具体例で、修験者自身が鉦山師の集団であったと考えられている。さらに山野をめぐるうち鉦脈を発見したり、その場所を金属精錬の蹈鞴集団に知らせたりしたこともあったであろう。「もののけ姫」のジゴ坊は「天朝（天皇）様」が探し求める、永遠の命を約束するというシシ神を探し仕留めるため、修験者の姿となつて異世界である山や森を歩きまわっていたのである。

10、 だいだらぼつち

だいだらぼつちの伝説は日本各地にある。柳田國男『日本の伝説集』にも各地で伝承されるこの巨人伝説を載せるが、名前のようにそれらの伝承に読み取れるだいだらぼつち像はかなり愛くるしい様子で、たくさんの悪戯と失敗の繰り返しを重ね日本中を歩き回りやがてどこかに姿を消してしまうようである。それに引き替えこの作品のだいだらぼつち像はまるで異質であるといえる。

この違いはこれらが伝説であることと関わってくる。伝説はそれぞれの地域と結びつき、伝承されるという特徴にあるといえよう。「昔、得体の知れない巨大な子どもが日本中を遊び場にしていたが、その時にこれこれしたのが、この山にな

った」と自分たちの土地にまつわる伝承を語り伝える。勿論土地に対する愛着と、それをもたらした子どもに愛情を込めて語るのである。

一方、この作品ではだいだらぼつちは神として描かれている。そうあのシシ神の夜の姿として描かれているのである。神は恐ろしい。自然は恐ろしい。夜の世界は人の時間ではなく、魔物が蠢く時間であり、恐ろしい空間、異世界であると考えられた。

「もののけ姫」におけるだいだらぼつちは半透明で、まるでその体の中に水を満々と溜めた地球そのものように描かれている。山を越え、隠れ里を巻き込む巨大なその姿は、まるでヤマタノヲロチの登場を思わせる。ヤマタノヲロチの話は、出雲国肥河上流にある隠れ里に害を与える存在として語られるが、ヤマタノヲロチは肥河そのものと考えられている。川の神つまりは水神（龍神）であるヤマタノヲロチは毎年同じ時期にその流域全てを呑み込み里を破壊する川の氾濫の様子を表している。しかし川の氾濫は一方では肥沃な大地をもたらしてくれる。川の上流にある異世界（神の世界）である大地の恵みを運ぶのである。

自然の力は凄まじい。一方で破壊し、もう一方で恵みを与える。ダイダラボッチがシシ神の神本来の姿であるのなら、その力に人間が抗う事など決してできるものではない。人は自然の中でただその神の力（自然の力）と共に生きているので

ある。スサノヲによって首をはねられたヤマタノヲ口は、人によって分断され、堰き止められる川の姿であろう。

11、 権力者の野望の果て

クライマックスシーンでエボシ御前は叫ぶ。「みな、よく見届けよ。神殺しがいかなるものか。シシ神は死をも司る神だ。怯えて後れをとるな」と。

アシタカヒコが最初に犯した「神殺し」という禁忌は、最後にまた繰り返される。しかし、今度は単なる山の神殺してはない。この世界の再生と破壊のエネルギーを内在する地母神殺しである。それも国家権力がそれを行うのである。この祟りは一人の少年の死では済まされるはずはない。

神を殺し、聖域を破壊し、武力を独占する。それは自分が新たな神となり、この世界に君臨するためである。人は愚かである。ただひたすら欲深く、満足を知らず、神になりたいと思うのである。この尽きぬ欲望を満足させようと人は心を見失う。心を見失った人はもう人ではない。

人が人を越えようともがく時、それは人としての最低限の努力があればいい。人の心を捨て去り、人として決して踏み越えてはならない禁忌を犯せばよい。そうして、権力者は力による支配を始めるのである。力を持てば持つほど、より強い力が必要となる。悪循環が繰り返さる。そうなるともう立

ち止まらない。ただひたすら破滅への道をひた走るようになる。そして力の限りのエネルギーを放出し、神に挑み自分が神に成り代わろうとする。

しかし神はもつと巨大なエネルギーを爆発させ、人間世界を飲み込んでいく。まるで人間の行いなど取るに足りないことだと嘲笑うかのように。人間が作り上げた文化など目もくれず、ただ神の力を誇示するかのよう。そして、壊滅的な状態を目の当たりにして、人間にはただ無常観だけが残されるのである。

死と再生の神として描かれるシシ神に対し、欲望の権化となった人間として描かれるのは、エボシ御前である。彼女は鉄を産み出し、また神を殺す。人間でありながらシシ神と同じように自然界から物質を再生させ、それによって死を与える力を手に入れたのである。いわば宇宙の秩序を破壊する存在として描かれている。

この神と人との対立の中で、主人公である少女サンやアシタカヒコは、超自然的霊格である神の声を聞き、神の意思を届ける力を持つ者、つまり巫女的性格を持つ者として位置付けられている。太古の時代の神と人、自然と文化との関係が中世には完全に崩れ、人間側の文化が大きき力を持ち始め、神、自然の存在をないがしろにし始める。両者の間にできた溝は、現在に至るまでどんどんと巨大化し深刻化してしまつた。

「もののけ姫」サンやアシタカヒコのようにその両方を繋ぐ存在は、もはや滅びゆく運命でしかありえなかったのである。そして神⇨自然⇨宇宙の秩序を忘れた人間もまた、滅びゆく存在であるうことを示唆しているのである。

まとめ

人知の及ばない凝縮された宇宙は、シシ神の森、いやむしろシシ神そのものであるといえよう。破壊された人の創り出した世界は、生と死つまり再生と破壊の神、シシ神のエネルギーで新たに創造されるのである。ただ一つの芽吹きから。

愛するモノを、守るモノを見つけた時、人は強くなれる。自分のおかれた現実を見定め、死と隣り合わせに生き抜く強さは、他のどんな権力をも打ち砕く。人は神には決してなり得ない。どんな力を持ってしても。自然の中で人が人としての尊厳を失わない限り、何よりも力強く生き抜くことができるのである。「もののけ姫」とは、人が人として与えられた生を精一杯生きることの大切さ、それを問い直す作品であると思う。

キャッチコピーの「生きる！」とは、そうした「神」や「動物」や「人」という枠にとらわれることなく、宇宙の秩序の中で「生きる」ことそのものに向けられた言葉であるように思えてならない。

参考文献

- 西宮一民校注 新潮日本古典集成『古事記』 S五七
武田祐吉訳注 中村啓信補訂・解説『新訂古事記 付現代語訳』 角川文庫 S五四
新編日本古典文学全集『万葉集』『日本書紀』『風土記』
『今昔物語集』『宇治拾遺物語集』 小学館
黒板勝美編『訓読 日本書紀』上・中・下巻 岩波文庫 一九八七
H・ガスター著 矢島文夫訳 『世界最古の物語』
現代教養文庫 社会思想社 一九八五
『国史大辞典』吉川弘文館
網野善彦『中世の非人と遊女』講談社学術文庫 二〇〇五
横井清『中世民衆の生活文化』上・中・下巻
講談社学術文庫 二〇〇八
窪田蔵郎『鉄から読む日本の歴史』 講談社学術文庫 二〇〇七
青井汎『宮崎アニメの暗号』 新潮新書 二〇〇八
田村克己『鉄の民俗』 森浩一他編 日本民俗文化大系三
『稲と鉄』 小学館 S六一
村上英之助『鉄の技術』 森浩一他編
日本民俗文化大系三『稲と鉄』 小学館 S六一

村山修一『山伏の歴史』 塙書房 S四五

五来重「大和三輪山の山岳信仰」

『山岳宗教史研究叢書 十一 近畿霊山と修験道』

名著出版 S五三

若尾五雄「近畿山岳信仰と丹生」

『山岳宗教史研究叢書 十一 近畿霊山と修験道』

名著出版 S五三

大林太良『稲作の神話』 弘文館 一九七三